



中国上海市におけるスポーツ活動：ソーシャル・ キャピタル形成に果たすスポーツの事例調査

著者	黒澤 寛己, 横山 勝彦
雑誌名	同志社政策科学研究
巻	12
号	1
ページ	115-118
発行年	2010-09-01
権利	同志社大学政策学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012650

中国上海市におけるスポーツ活動

—ソーシャル・キャピタル形成に果たすスポーツの事例調査—

黒澤 寛己・横山 勝彦

1. 調査の概要

2009年12月25日～28日にかけて、日本広報学会「スポーツ広報とソーシャル・キャピタル研究会」の会員5名¹が、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）形成に果たすスポーツの事例調査のため中国上海市を訪問した。

周知のように、中国は2008年「北京オリンピック」を開催し、アメリカの36個を大きく上回る金メダル51個を獲得し、その意味では世界第1位のスポーツ大国の地位を築いた。さらに、本年2010年5月1日～10月31日まで、「上海万博」が開催され、名実ともに世界の一流国家へと成長を遂げている。

今回は、在留邦人を含む多くの外国人が駐在し、複雑な多民族・多国籍文化を形成している国際都市上海を事例に、スポーツを活用したソーシャル・キャピタルの構築について、美津濃（中国）体育用品有限公司・上海石橋水産品有限公司²の各企業を中心とした支援体制のもと調査を行った。そして、スポーツの「強化」と「普及」の両面を調べるため、国家のスポーツエリート養成施設「東方緑舟体育訓練基地」と日本人駐在員を中心としたボランティアによる「龍心館柔道場」を訪問先として選定した。

2. 東方緑舟体育訓練基地（12月26日訪問）

体育エリート養成学校である「東方緑舟体育

訓練基地」は、上海市の郊外、定山湖青浦地区にある。そこには、広大な敷地の中に卓球・バドミントン・バレーボール・バスケットボールの専用体育館、競泳・水球・シンクロの各専用プール、陸上競技場、ウエイトトレーニングセンター、漕艇練習場などの訓練施設、体育事務局、選手寮、食堂といった宿泊施設が整備されている。

この中でも注目すべきは、「水泳水槽実験室」である。この施設は、長さ6m、幅4m、高さ1.5mの水槽で、コンピューターで調節された一定の水圧を加え、水泳選手に対する泳法の解析、パワーの測定、心肺及び心拍の測定を行い、各測定値から最適なフォームや練習方法を開発していくというものである。

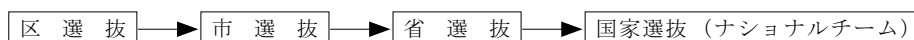
中国におけるスポーツ選手の競技力向上システムは、図1に示したような単位で選抜及び強化が行われており、当施設は省選抜選手の訓練基地となる。各訓練基地には在籍できる人数が決まっており、年に二回程度チーム内のランキングにより入れ替えが行われる。在籍している選手の年齢は概ね12歳から40歳くらいまでであり、種目によって異なる。コーチについても、選手の成績によって給料が査定されている。学校適齢期の選手は練習の合い間に基地内の学校に通学し勉強しているが、生活のメインは練習であり、日本の部活動や総合型地域スポーツクラブとは全く異なる、まさにスポーツエリートのみを養成する徹底した施設である。

ただ、そうはいつでも年齢や競技のレベルに

¹ 横山勝彦（同志社大学）、川戸和英（大同大学）、伊吹勇亮（京都産業大学）、黒澤寛己（京都市立塔南高校）榊原大輔（同志社大学大学院）

² 1999年に石橋修氏（同志社大学工学部卒、体育会柔道部出身）により設立された、スーパーマーケットやレストランを中国の都市に展開している企業。

図1 中国の国家代表選抜・強化システム



より途中で退出を命じられる選手が必然的に生まれるのであるが、これについては基地の紹介により個人に応じた就職先が斡旋されることもあるとのことである。

通常、この施設は、中国の体育エリート養成施設であるため見学は認められていないが、美津濃（中国）体育用品有限公司の配慮により、特別に見学が許された経緯にある³。したがって、その背景にまで深く迫る聞き取り調査や資料・データの収集は不可能であったが日本のスポーツ施設との比較では以下の二点が確認できた。

一点目は、施設の充実度である。日本のように、一つの体育館を複数の種目で時間割を決めて使用するのではなく、巨大な専用施設を各競技の選手が時間や場所を気にすることなく独占練習できる点は、競技力向上の面からは、その効果に格段の差が生じる。

二点目は、選手の競技レベルの高さである。卓球・バドミントン・バレーボール・水泳の選手の体型は、一目で判別できる程、筋肉質で柔軟性に富んでおり、そのプレーは俊敏で力強い動きであった。日本の部活動のように、トップ選手と初心者と同じ環境で練習するのではなく、エリート選手が高いレベルで、かつ生き残りもかけた厳しい環境の中での生活は、体力面・精神面の強化という点においては著しいと考えられる。

このような施設面・競技面におけるインセンティブは、中国の国家戦略としてのスポーツ活用を端的に表している。つまりスポーツを国家の広報手段として捉え、オリンピックなどでの自国選手の活躍を最大限活用し、国家の対外的承認とその優位性を確立しようとしているのである。

3. 龍心館 長寧・相園柔道倶楽部

(12月27日訪問)

上海には世界152カ国から多くの企業が進出している。中でも日本からの企業が最も多く、続いてアメリカ、韓国、シンガポール、ドイツ、マレーシア、フランス、カナダ、イギリス、オーストラリアなどとなっている。そして、そこには国籍を超えたコミュニティが存在し、文化活動やスポーツ活動を通じた交流が活発に行われている。

今回、調査を行った「龍心館」は、2001年に在上海日本人はもとより中国や世界各国の人たちに日本の伝統的運動文化財である柔道を普及させる事を目的に、相園英速氏⁴と弓部重明氏⁵を中心とした日本の企業駐在員により設立された。

その簡略な沿革は、図2に示した通りであるが、1998年に上海駐在の日本人の有志が「上海柔道部」を設立したのが始まりである。その後、2001年に正式に「龍心館」が設立され、現在では上海市虹橋地区の上海西郊学校（中学校）内に約120畳の道場で、週2日、約60名の会員が年齢・レベルに応じた練習に励んでいる。

道場の正面には、柔道の創始者「嘉納治五郎⁶」の写真とその修行目的である「精力善用」「自他共栄」の額が掲げられており、欧米の道場によく見られるマットや粗末な畳を使用することなく、競技用の柔道畳が隙間なく敷かれ、安全面にも充分配慮されている。

練習内容についても、礼法が遵守されており、準備体操・打ち込み・寝技・立技の乱取稽古といった、日本の伝統的な方法が採られていた。

練習日は、木曜日と日曜日の週二日で、クラスは「初心者」「小人」「一般」に分かれて其々のレベルに応じた練習が行われている。日本人・中国人・欧米人が一緒になって、約2時間にわ

³ 本施設見学については、美津濃（中国）体育用品有限公司の坂本栄樹氏（同志社大学商学部卒、体育会柔道部出身）の支援を受けた。

当日の施設案内、システムや設備の詳細については同社の大倉明彦氏と鈕佳平氏の説明を受けた。

鈕佳平氏は同施設バドミントン部門の出身者で、日本の青森山田高校及び近畿大学に留学経験を持つ。

⁴ 藤田（中国）建设工程有限公司勤務、講道館柔道五段

⁵ 上海日生食品物流有限公司勤務、講道館柔道四段

⁶ 日本の教育家、講道館柔道の創始者、1860年～1938年

図2 龍心館の歴史

1998年	上海柔道部設立
2001年	龍心館設立 相園館長、村田最高顧問、山本師範、弓部師範代
2004年	全日本学生柔道連盟 上海遠征、香港青少年柔道大会参加
2005年	関西学生柔道連盟 上海遠征、そごう日本祭り（柔道演武）
2007年	正木嘉美氏（元世界チャンピオン）来館、新道場移転
2008年	上海女子チーム金鷲旗高校柔道大会（福岡県博多市）遠征（相園館長引率） 京都市大学体育会柔道部 上海遠征 斉藤 仁氏・山下泰裕氏（元オリンピックチャンピオン）来館、 杭州柔道演武（日中文化交流）

たり熱心に汗を流す練習風景は、まさに日本文化を活かした国際交流の縮図といえるものであった⁷。

こうした活動をソーシャル・キャピタルの視点から分析すると、次の二つの点が確認できよう。

一つ目は、柔道という身体運動を通じた「教育」の側面である。練習には多くの日本人駐在員の子弟と中国人の子ども達が参加していた。道場の目的は、相園館長によれば「日本人・中国人を始め、世界各国の人たちに日本の伝統的武道である柔道を普及させる事」にあるという。上海という多民族が混在して生活している都市においては、モラル・マナー醸成の一助ともなっていると思われる。

二つ目は、柔道を通じての「交流」の側面である。上海においては、都市の住民と地方農村からの出稼者、各国の駐在員など、多種多様な民族・国籍・言語を持つ人々が集まって、特殊なコミュニティが形成されている。このような複雑なコミュニティにおいては、柔道という日本の文化や伝統に根ざした身体運動が、身体を動かすといった単なる楽しみにとどまらず、多文化への理解あるいは多元的な価値の認知といった交流の手段として有効であると考えられる。

まとめ

今回の調査をソーシャル・キャピタルの持つ二つの要素である「ハードパワー」と「ソフトパワー」から考えると、「東方緑舟体育訓練基地」のような国家的なスポーツ強化施設を中心に、全国各地からスポーツ能力に優れた子ども達を発掘し、国家代表に育て、オリンピックや国際大会で金メダルを獲得するという方法は、その是非については議論があるところだが、経済力や軍事力と同じような国家の威信を高める「ハードパワー」形成に最も効果的な方法と言えるだろう。

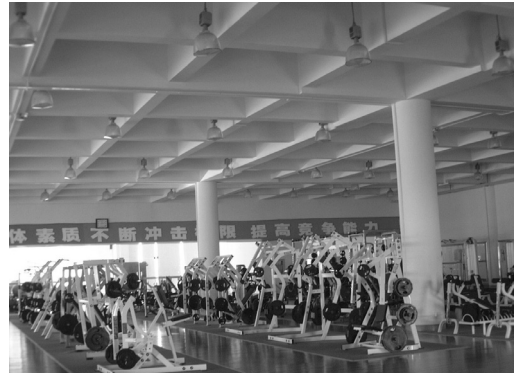
また、「龍心館柔道場」のようにボランティアのスタッフが中心となり、地道に日本の伝統運動文化財である柔道をコミュニティに根付かせる方法は、文化的な教室や地域の慣習的な行事などと同じような「ソフトパワー」を形成する効果的な手段であるとともに、青少年への教育的な効果も期待できるのである。

なお、今回の調査では時間的な制約もあり、こうしたソーシャル・キャピタル形成の背景にある中国の国家的なスポーツに関する法整備や基本施策、民間スポーツクラブに関する条例や規制などについて言及することができなかった。これからの課題としたい。

⁷ 当日は、練習終了後の交流会で相園氏及び弓部氏から道場の歴史、設立までの経緯、道場の指導方針などについてインタビューを行った。



東方緑舟体育訓練基地の建物



東方緑舟体育訓練基地のトレーニング機器



龍心館での練習風景



龍心館での柔道指導（黒澤・横山）



龍心館の練習生（右、黒澤）